

唐都長安樂遊原詩考

——樂遊原の位置とそのイメージ——

植 木 久 行

(1)

大唐の都長安。そこに住む百萬を超える人々の格好の行樂地——樂遊原は、唐詩の世界にあっても、李商隱の「樂遊原」詩をはじめとする一連の作品が、たちまち脳裡に思いうかぶほど、都長安をいろいろ著名な「歌枕」であったと評してよい。

樂遊原は、長安城内で最も地勢が高く、慈恩寺(晉昌坊の東半分)や杏園(通善坊)・芙蓉園(皇帝の離宮南苑)などとともに、廣大な曲江池(周七里、占地三十頃)⁽¹⁾を中心とする景勝地區を形成していた。このため、樂遊原を詠んだ詩のなかには、しばしば曲江池も歌われている。⁽²⁾長安城内東南部一帯の地である。張説の詩には、

樂遊形勝地 樂遊は形勝の地

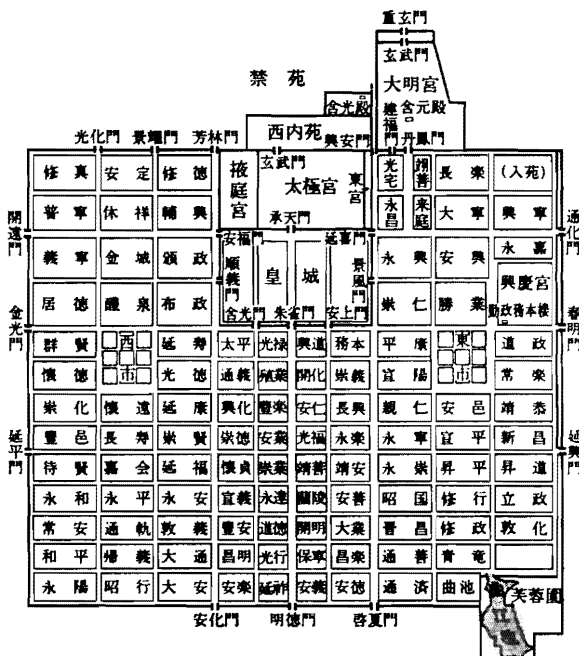
表裏望郊宮 表裏 郊宮を望む

と歌われている(「三月二十日〔一作三月三日〕詔宴樂遊園、賦得風字」)。

松村昂の調査によれば、『全唐詩』のなかには、樂遊原・樂遊園・樂遊廟を詩題とした作品が、すべて二十四家三十首であるという。しかし、筆者の調査によれば、二十八家三十四首を数え、詩中に出現する場合を加えると、さらに五家六首を増すことができる。なかでも中晩唐期の白居易と杜牧がそれぞれ二首、李商隱が四首も作っていることは、やはり注目すべき現象である。李商隱は若いころ、⁽⁶⁾

春夢亂不記 春夢 亂れて記えず

春原登已重 春原 登ること已に重なる



唐長安城復原図（『中國古代建築史』より）

と歌う（樂遊原）。また中晩唐期の不遇な詩人、劉得仁は、「樂遊原春望」詩のなかで、

樂遊原上望 樂遊原上より望めば
 望盡帝城春 望み盡くす 帝城の春
 始覺繁華地 始めて繁華の地なるを覺ゆ

應無不醉人 應に醉はざる人無かるべし
 雲開雙闕麗 雲開いて 雙闕麗しく
 柳映九衢新 柳映じて 九衢新たなり
 愛此頻來往 此を愛して 頻りに來往す
 多聞逐此身 多聞 此の身を逐ふ
 と歌い、樂遊原に對する深い愛着心を表白した。

(2)

樂遊原の名は、前漢の宣帝（前八七〜前七四年在位）が神爵三年（前五九年）の春に造營した樂遊苑に由來する（『漢書』卷八、宣帝紀）。樂遊苑は、『西京雜記』卷一によれば、艶麗な紅い花をつける玫瑰樹（バラ科）が自生し、汗血馬の好物、苜蓿（モロコシ）におおわれた美しい離宮であった。當時の都長安の、東南郊外十數キロの地である。當時すでに、唐代の曲江池の前身となる湖もあって、いわば、水と緑にあふれた郊外の保養地であった。

樂遊苑の地は、じつは秦代、宜春苑や宜春宮が置かれたところである。二世皇帝胡亥（前二一〇〜前二〇七年在位）は、ほかならぬこの離宮（宜春宮）のなかで殺され、埋葬された。

『史記』卷六、秦始皇本紀には、「黔首（庶民の禮）を以て二世を杜南の宜春苑中に葬る」とある。

宜春宮と宜春苑は、漢代そのまま繼承された。武帝（前一四一〜前八七年在位）は、長安城外の長楊宮のほとりで狩獵した歸途、宜春宮にたちよつた。このとき、著名な賦家、司馬相如は、「秦の二世を哀しむ賦」を作り、奸臣を信じて國家を滅亡させた皇帝の、「蕪れ穢れたる」墳墓を見て嘆いたという。しかし、この歴史的事實は、後世の文學者たちの意識には、ほとんどのぼらなかつた。

司馬相如の賦のなかには、當時の宜春宮の様子が次のごとく詠まれている。

登陂陲之長阪兮 坐入曾宮之嵯峨

臨曲江之隄州兮 望南山之參差

武帝の一行の車馬は空びつつ、傾斜した長い阪をのぼり、曾なりあう宮殿の、嵯峨としてそびゆるなかへと入りゆく。曲江の隄き州を前にして、參差として高く低くつらなる終南山の山なみを眺めやる——。句中の「曲江」には、從來、固有名詞・普通名詞の二説があるが、いずれにしろ、その湖が唐代の長安城の東南隅に位置した曲江池の前身であることは、ほぼ疑いない。

宣帝の樂遊苑の造營は、秦代以來の宜春宮と宜春苑を新たに整備しなおしたものである（程大昌『雍錄』卷六、宜春苑の條參照）。のちには、この廣大な樂遊苑の一角に、宣帝を祀る樂遊廟が作られた。

樂遊とは、どんな意味であろうか。『漢書』宣帝紀によれば、宣帝は即位する前の若き日、都の南郊外、杜縣（京兆府）や鄠縣（扶風府）のあたりを好み、おおむね下杜に滞在していたという。下杜とは、宜春苑のあった地名である（『雍錄』卷六）。つまり、「樂遊」の二字は、宣帝自身が自由氣ままに樂しく遊んだ若き日々へのなつかしみをこめた表現なのであらう。この意味で、顏師古注（『漢書』宣帝紀）に、樂の字を「來洛の反」とするのも首肯できる。

ところで、北宋の宋敏求撰『長安志』卷五、宮室三に引く『關中記』（潘岳撰）には、

宣帝・許后葬長安縣樂遊里、立廟於曲江池北、名曰樂遊廟。因葬（地）爲名。

とある。これによれば、宣帝の樂遊廟は、その陵墓「杜陵」（樂遊廟の東南）の所在地「樂遊里」にちなむ名稱となる。しかしおそらく、この樂遊里なる名稱自體も、宣帝の「樂遊」の思い出をこめた新しい地名なのであらう。

(3)

樂遊苑や樂遊廟のあつた高原——樂遊原は、隋唐時代、都城の位置の變遷にともない、その主要な部分は、郊外から城内へと入ることになった。この結果、樂遊原は、都に住む人々にとって、遠出する必要のない格好の城内の行樂地となつたわけである。

ここで、唐代の樂遊原の具體的な位置を確認しておきたい。張九齡の「樂遊原に登りて春望、懷ひを書す」詩には、

城隅有樂遊 城隅に樂遊有り

表裏見皇州 表裏 皇州を見る

と歌われ、韋應物の「樂遊廟に登りて作る」詩には、

高原出東城 高原 東城に出で

鬱鬱見咸陽 鬱々として咸陽みやこを見る

と歌われている。韋應物詩の前句は、樂遊廟のある高原（樂遊原）が長安城内の東半分の地につき出る、つまり、高くそばだつことを意味しよう。

場所をより限定した文獻としては、中唐の沈既濟撰「任氏傳」（七八一年作）をあげることができる。玄宗の天寶九載（七五〇）夏六月のこととして、「鄭子、驢ろばに乗りて東し、昇

平（坊）の北門を入る……東して樂遊園に至る」とある。つまり、樂遊園は、昇平坊内の十字街の東（坊内の東半分）にあつた。この場合の樂遊園とは、おそらく漢代の樂遊廟のあつた地を指そう。沈既濟は、『建中實錄』を著した史學者でもあり、その記述は信憑性が高い。

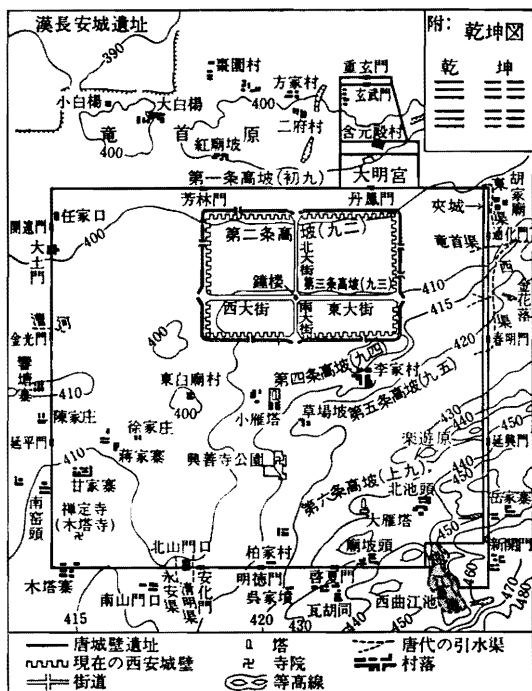
また唐の韓楊撰『天文要集』（『太平御覽』卷一九七所引）の逸文には、

宣帝立廟曲江之北、名曰樂遊廟、即今昇平坊内基趾、是也。

とあり、漢の樂遊廟の跡が昇平坊内に殘存することを指摘する⁽¹⁴⁾。この點は、『漢書』宣帝紀の顔師古注も同じである。北宋の宋敏求撰『長安志』卷八、昇平坊には、「東北隅、漢樂遊廟」とある。漢の樂遊廟の遺跡は、唐代なお殘存していたため、その場所の比定自體は、わりあい容易であつたらしい。

(4)

唐の韋述撰『兩京新記』の逸文（『玉海』卷一七一所引）には、「宣帝の樂遊廟は、亦た樂遊苑と名づけ、亦た樂遊原と名づく」とある⁽¹⁵⁾。樂遊廟・樂遊苑（園）・樂遊原の三名稱は、唐



六岡圖（馬正林「唐長安城総体布局の地理特徴」より）

代、全く同意として使用されたい。しかし、昇平坊の東北隅の樂遊廟・樂遊園・樂遊原という比定は、かなりおおまかなものであったらしい。常識的にいっても、高原は一般に「點」よりも「面」を構成する。樂遊原の場合も、樂遊廟の故地を中核としつつ、ある方向に伸びる支脈を持つのではな

かろうか。

長安城内には、いわゆる龍首原の支脈が東西方向に六條の高坡（臺地）を作り出し、東南部の地勢が最も高く、西北にすすむにつれて、地勢は下降していた。この六條の臺地は、六岡・六坡などと總稱され、隋の大興城（唐の長安城）の設計者、宇文愷は、この地勢を易の乾の卦（☰☰）に見たてて都城プランに生かしたという（『元和郡縣圖志』卷一の原注など）。

馬正林の「唐長安城總体布局の地理特徴」によれば、最も南よりの第六の高坡、いわゆる上九の臺地は、長安城南壁の「啓夏門」付近から城内へと入り、慈恩寺の浮圖（大雁塔）付近で東北へと屈曲し、漢の宣帝の樂遊廟のある地（昇平坊東北隅）を通過して、長安城東壁の「延興門」外へと伸びていた。上九の臺地は、六岡のなかで最も高く、標高は四三〇～四四〇メートル前後におよぶ。そして樂遊廟の故地は、圓形の「饅頭」式の突出した形態をもち、四五〇メートルに達していた。

この上九の臺地には、慈恩寺や青龍寺（新昌坊の東南隅・龍華尼寺（昇道坊西北隅））などが建立され、緑

濃き高燥の臺地であつたため、避暑や眺望にすぐれていた。ちなみに、大雁塔が悠かな眺望に富むのは、もちろん、その高層構造に基づくであろうが、じつはその場所が上九の臺地であつたことも決して忘れてはなるまい。

北宋の張禮の「遊城南記」(一〇八六年作)の原注には、

樂遊之南、曲江之北、新昌坊有青龍寺。北枕高原、前對南山、爲登眺之絕勝。

とある。これによれば、張禮は、昇平坊の東北隣の新昌坊の東南部に位置する名利青龍寺を、明らかに樂遊原の南斜面に位置したと考えていたらしい。要するに、樂遊原とは、樂遊廟のあつた昇平坊の東北隅を中核としつつも、その周邊の坊(新昌・昇道・昇平・宣平)の一部を廣く含めたらしい。今日、中國の歴史地理研究家の武伯綸や曹爾琴なども、ほぼ同じ見解である。⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾

(5)

こうした廣義の樂遊原の解釋と關連して興味深いのは、『長安志』卷八、昇平坊東北隅の「漢樂遊廟」の原注である。

漢宣帝所立、因樂遊苑爲名。在高原上、餘址尙有。長安中、太平公主、於原上置亭遊賞。後賜寧・申・岐・薛王。

其地、居京城之最高、四望寬敞。京城之内、俯視指掌。

この記事の一部は、開元十年(七三二)の作とされる韋述撰『兩京新記』の逸文のなかにも見える。おそらく、その大半は『兩京新記』の記述を繼承したものである。則天武后の建國した周朝の長安年間(七〇一〜七〇四)、娘の太平公主が樂遊原上に亭を築いて遊賞した。開元元年(七二三)、謀反の罪を問われた太平公主が玄宗によって處刑されると、その亭は玄宗の兄弟たち、寧王憲・申王瑒・岐王範・薛王業に與えられたという。公主の謀反事件のとき、岐王範や薛王業は、その平定に協力している。公主の樂遊原上の亭(おそらく多くの亭臺や樓觀をもつ廣大な園林地・別業)を兄弟たちに賜與したのは、論功行賞の意味あいがあつてのことと違いない。

太平公主と樂遊原との關係は、『新唐書』卷八三、諸帝公主傳のなかにも、

始、主(太平公主)作觀池樂遊原、以爲盛集。既敗、賜寧・申・岐・薛四王。都人歲祓禳其地。

とある。觀や池をもつ樂遊原上の別業(宴遊に供される傾向の強い莊園)の賜與が恩賞や懷柔(玄宗は兄の憲や瑒をさしおいて即位した)の意味をもつとすれば、武伯綸の指摘することく、その園林の範圍は、「一定是很大的」であつたと考えるのが

自然であらう。

公主の樂遊原上の盛集に比定しうるかも知れない作品群が現存する。『文苑英華』卷一七六に收める李嶠・蘇頌・沈佺期・宋之問・李义・韋嗣立・李邕・邵昇らの「奉和《初春幸太平公主南莊》應制」詩が、それである（このうち二首は、李攀龍撰とされる『唐詩選』所收）。この八首の詩は、太平公主が皇帝の姉として權勢をふるった中宗（七〇五～七〇九年在位）期の應制詩であることは、詩中の表現から見て疑いない。

そしてこの公主の南莊を、前引の「樂遊原の觀池」と見なす説は、すでに江戸時代の戸崎允明（一七二四～一八〇六）の『箋註唐詩選』卷五や久保天隨『唐詩選新釋』（一九〇八年、博文館）などに見える。今日通行する前野直彬『唐詩選』（岩波文庫）・目加田誠『唐詩選』（明治書院）・中島敏夫ほか『唐詩選』下（學習研究社）などは、高木正一の「景龍の宮廷詩壇と七言律詩の形成」⁽²⁷⁾とともに、戸崎允明らの説を繼承し、長安南郊の樂遊原の別莊を指すと考えている。つまり、わが國の『唐詩選』の注釋書類は、おおむね樂遊原の基本義（長安城内の昇平坊の東北隅を中心とする周邊地域）に言及せず、いきなり、「南莊」という以上、長安の南郊にあったと論じており、明らかに基本義への言及が缺如している。

唐都長安樂遊原詩考（植木）

ここで、「《初春、太平公主の南莊に幸す》に和し奉る、應制」詩の内容を少し見てみよう。蘇頌の詩の首句には、「主第の山門 灞川に起こる」とある。また宋之問の首聯にい

青門路接鳳凰臺 青門の路は鳳凰の臺に接り

素澹宸遊龍騎來 素澹の宸遊 龍騎來る

「青門」とは、長安城の東門（清の王堯衢『古唐詩合解』卷下）を廣く指す。⁽²⁹⁾「素澹」とは、水の色の素き澹水を指し、長安城の東郊約五キロの地を北流する。宋之問詩の第六句に、「酒は南山に近くして壽杯を作す」とあるのによれば、公主の設けた南莊内の宴席は、長安の南郊につらなる終南山に近く（『古唐詩合解』參照）、それでいわゆる南山の壽杯へと、連想が自然に展開するわけである。⁽³⁰⁾

このように見てくると、盛集の舞臺の「南莊」は、長安の東南郊外に位置していたと考えられよう。⁽³¹⁾長安の東郊外、灞水や澹水のほとりは唐代、皇族や貴族たちの遊賞・宴集に供される池林・園亭が多く集中していたところであり、この意味でも南莊の比定場所にふさわしい（拙著『唐詩の風土』參照）。

公主の南莊を、長安郊外の樂遊原上に比定する説が、長安付近の歴史地理に暗い注釋者たちが陥った共通の事實誤認で

あると、一蹴することはできないようである。公主の「觀池」が死後、玄宗の四人の兄弟に賜與された事實を思いおこすと、次の二つの記事が注目されてくる。

侍臣已下、譙于春明門外寧王憲之園池。

〔舊唐書〕卷八、玄宗本紀、開元十八年の條

城東有薛王別墅、林亭幽邃、甲於都邑。

〔舊唐書〕卷一〇六、李林甫傳

寧王憲と薛王業の園池（別墅）は、ともに長安の東郊外にあり、なかでも薛王のそれは、當時、長安付近で第一と評される幽邃な林亭であった。⁽³²⁾ 寧王と薛王は、すでに述べたごとく、太平公主の謀反事件のさい、その平定に協力している。

玄宗は、四人兄弟のなかでも、寧王と薛王の二人によりよい園池を提供したのではないか。いいかえれば、寧王と薛王の園池は、じつは太平公主のそれを分割して繼承・發展させたものではなからうか。筆者は、この憶測を禁じることができない。

かくして、樂遊原には、①長安城内の昇平坊の東北隅周邊の地を指す基本義のほかに、②城外にひろがる廣義の用法とが同時にあったことが考えられよう。それは、①と②が、③とともに漢代の樂遊苑の故地であること、④いわゆる上九の臺

地の延長線上にあること、の二點を共通することにもよる。この意味では、元の駱天驥「類編長安志」（二二九六年自序）卷四に、

樂遊園、在京城清龍坊。有宣帝樂遊廟基址。

の奇矯な記述も、③④の二つの條件を満たしている。文中の「清龍坊」が青龍坊の誤訛であるとすれば、その地は慈恩寺のある晉昌坊の東南にあたり、慈恩寺へと通じる曲江池の支流が通っていた（曲池坊の北）。

(6)

樂遊原の名にちなむ「樂遊郷」の、從來の比定場所について觸れておきたい。郷とは、縣以下の行政單位をいい、五百戸を一郷、百戸を一里とする人爲的郷里制にもとづく名稱である。この意味で、自然に形成された「村」とは異なっている。

樂遊郷の名は、唐の高祖李淵の「旌表孝友詔」（六一九年）のなかに、「雍州萬年縣樂遊郷」として見える。⁽³³⁾ 萬年縣に所屬する郷である以上、それは長安城の東半分の城外付近の地であるはずである。清の陸耀遙らの『咸寧縣志』（一八一九年）卷二に收める「唐疆域圖」では、その所在地を、長安城の南

郊、南壁の中央の明德門の地から長安城東端に至る郊外に位置づけ、「案ずるに、郷は當に城南に附近すべし。樂遊原を以て名を得たり」とする。この説はおそらく、元の李好文『長安志圖』に收める「城南名勝古跡圖」に見える樂遊原の位置（小雁塔〔薦福塔〕の西南、明德門より西の地）を参照しつつ、萬年縣に所屬する點を加味して比定したらしい。その比定場所は、武伯倫の「唐長安郊區萬年・長安縣鄉里位置示意图」³⁴のそれとほぼ同じである。

これに對して愛右元の「唐代兩京鄉里村考」³⁵に付載する「長安郊區鄉比定圖」では、樂遊郷の位置を、長安城の東南郊外（長安城の延興門から曲江池の東に至る城外の地）に比定する。公主の樂遊原の觀池が東南郊外にあったらしいことを考えると、愛右説のほうがよりよく思われる。しかし、二説はいずれも上述の④⑤の二條件を満たしており、現在のところ、最終的な決め手はなさそうである。³⁶

(7)

さてここで、昇平坊の東北隅周邊の地を指す樂遊原の、唐代における實態やイメージを探ってみよう。安史の亂がおこる以前の唐前半期、樂遊原は三月三日の上巳節や九月九日の

唐都長安樂遊原詩考（植木）

重陽節になると、盛大なにぎわいぶりをみせた。しかし平素は、住民の少ない、野草や樹木の生い茂る荒地であり、とくに墓地の多い廢墟であった。昇平坊の東北隅には、漢の樂遊廟の遺跡があった（前述）。沈既濟の「任氏傳」によれば、狐の女妖「任氏」が鄭子を招いた邸宅は、この付近にあり、「みな蕪荒（野草の生い茂る荒地）及び廢圃（荒れた畑）のみ」であったという。このことを鄭子に告げた胡人の言葉には、「墮圃（くずれた土塀）・棄地（あき地）にして第宅なし」とある。天寶九載（七五〇）の話である。

こうした樂遊廟付近の状況は、豆盧回の「樂遊原に登りて古を懷ふ」詩のなかにも歌われている。宣帝の雄圖がついえ去り、その餘址のみ残る、と歌ったのち、

昔爲樂遊苑

昔は樂遊の苑爲るも

今爲狐兔園

今は狐兔の園爲り

朝見牧豎集

朝には牧豎（牧童）の集ふを見

夕聞棲鳥喧

夕べには棲鳥の喧しきを聞く

と詠ずる。作者の豆盧回は、岑仲勉の考證によれば、「京兆（府）の少尹、天寶時に仕え」た人である（「讀全唐詩札記」）。とすれば、「任氏傳」の背景となった時期とほぼ重なりあうことになり、「今は狐や兔の園爲り」という描寫も、「任氏傳」

のそれと共通する。

さらに昇平坊の東隣、昇道坊の南半分には、無数の墳墓が散在していた。唐の李復言『續玄怪錄』⁽⁴⁹⁾卷三、張庚の條には、元和十二年(八一七)のこととして、

(張)庚自度、此坊(昇道坊)南街、盡是墟墓、絶無人住。

とある。

そして昇道坊の北隣の新昌坊にあった名利青龍寺の前身「靈感寺」は、隋の大興城(即ち唐の長安城)造營のとき、新都建設豫定地内にあった古い墳墓を掘り返して城外に移し、それを供養するために建立されたものである。すでに述べたごとく、靈感寺のある場所は樂遊原の南斜面にあたる高燥の臺地であり、漢代以來、都郊外の有名な埋葬地帯であった。中國では、墳墓は古來、都邑の城外にいとむのを原則とした。大興城造營のさい、できる限り墳墓を掘り返して郊外へ移したが、この東南部は高燥の臺地で居住に適さなかつたこともあって、墳墓がある程度残存してもかまわなかつたのであろう。ちなみに、長安城東壁の春明門や延興門の外にも、墳墓が点在していた。⁽⁴⁰⁾

このようにみてくると、樂遊廟の遺跡が残存した昇平坊東北隅周辺の地は、墳墓の多い荒原であった。狐は古來、墳墓

のある地に棲むものとされており、この意味で、樂遊廟周辺の地こそ狐の出沒にふさわしい。昇平坊の西隣にあたる永崇坊にも、性惡な狐が住んでいた。⁽⁴²⁾ 初唐の詩人盧照隣(六三〇? - 六八〇?)の「七日登樂遊故墓」詩の存在も注意されてよい。

こうした樂遊原の實態は、屋質の高い都のなかで、貧苦にあえぐ人々の居住地となりうる可能性を示している。貧苦に堪えて科擧をめざした、もと僧侶の詩人賈島は、張籍の「賈島に贈る」詩のなかで、

籬落荒涼僅僕飢 籬落荒涼として僅僕飢え

樂遊原上住多時 樂遊原上 住むこと多時

と歌われるごとく、ほかならぬ樂遊原のほとりに住んでいた。賈島は、新昌坊の青龍寺に滞在したこともあり、この樂遊原付近とは深い縁があった。賈島の樂遊原上の住まいの具體的な位置については、李嘉言「賈島年譜」⁽⁴³⁾・武伯綸「唐萬年・長安縣鄉里考」⁽⁴⁴⁾・曹爾琴「說唐長安的青門」⁽⁴⁵⁾の三説が、すでに提出されている。このうち、李と曹は城内、武は延興門外の龍首郷に比定したが、現在のところ、李嘉言の「昇道坊」説が最もすぐれる。武伯綸も曹爾琴も、李嘉言のそれを⁽⁴⁶⁾見ていないらしく、曹爾琴の結論は李嘉言のそれとほぼ同じ

であるが、坊名の比定にまでは及んでいない。

李嘉言の説によれば、賈島は長慶三年（八三三）、四五歳のとき、昇道坊に住んだという。また汪賢度の「賈島」によれば、李の説をさらに發展させて、長慶年間（八二二～八二四）から開成元年（八三六）にいたる十數年間、賈島は昇道坊に住みつづけたとする。開成元年とは、賈島が遂州長江縣主簿となる前の年である（五八歳）。賈島詩のなかには、「昇道の精舎の南臺にて、月に對して姚合に寄す」詩があり、賈島は少くともある時期、精舎に住んだらしい。

昇道坊（青門里）の住まいはまた、賈島詩のなかなどに、「野居」「原居」「原東居」などと呼ばれるものである。友人の姚合は、「賈島浪仙に寄す」詩のなかで、賈島の貧窮ぶりを、次のごとく歌っている。

衣巾半僧施	衣巾は	半ば僧施し
蔬菜常自拾	蔬菜は常に自ら拾ふ	
凜凜寢席單	凜凜として寢席單にして	
翳翳竈煙濕	翳翳として竈煙濕ふ	
頽籬里人度	頽れし籬	里人度り
敗壁鄰燈入	敗れし壁	隣燈入る

また同じ詩中には、「居る所は率ね荒野、寧ぞ京邑に在る

唐都長安樂遊原詩考（植木）

に似ん」とも詠ずる。都の中にありながら、世界的都城の繁華な雰圍氣とは全く無縁の荒涼たる樂遊原の地に、ほそぼそと暮らす哀れな姿である。

姚合の「賈島に寄す」詩のなかにも、賈島の住居を描寫して、

寂寞荒原下 寂寞たり 荒原の下

南山祇隔離 南山は祇だ籬を隔つるのみ

と歌う。荒原とは、樂遊原を指す。樂遊原のほとりからは、南の終南山の景色がまじかに見えたのである。同じ詩のなかには、「朝昏 鼓到らず、閑臥 益々相宜し」ともある。鼓とは、城門・坊門の開閉を知らせる曉鼓・暮鼓を指す。

こうした樂遊原の實態は、そこが月を眺める名所と意識されたことも關連しよう。中唐の楊憑には、「樂遊園にて月を望む」詩がある。また『續玄怪錄』卷三、張庚の條には、元和十二年（八一七）十一月八日、張庚が昇道坊の南街で月を眺めていると、艶麗な侍女が數人、庚の庭先に入り、

「步月逐勝、不必樂遊原。只此院小臺藤架、可以樂矣」

といい、酒宴を開いた話をのせる。月影をあびつつ探勝する場合、坊内であれば問題ないが、他の坊にもわたるときには、いわゆる夜行の禁に觸れてしまう。しかし、ここは人の

あまり住まない荒原ということもあって、京兆尹の管理のゆるやかな「園外の地」であつたらしい。園外の地とは、一般に長安城南よりの四坊分を廣く指すが、この昇道坊付近もその範圍内に含まれていたものと考えてよい。姚台の「昊天・玄都觀に遊ぶ」詩の、

園外坊無禁 園外の坊には禁無く

歸時踏月明 歸る時 月明を踏む

の句が思いおこされる。

賈島詩に見える樂遊原の住居の描寫を見てみよう。「張籍・王建に酬ゆ」詩には、「疏林 荒宅 古坡の前」とある。古坡とは、秦漢以來の歴史をもつ、ものふりた臺地——樂遊原のことであろう。耿漳の詩の「故丘」にあたる（登樂遊原）。

また賈島の「錢庶子に寄す」詩には、

曲江春水滿 曲江 春水滿ち

北岸掩柴關 北岸 柴關掩ふ

祇有僧鄰舍 祇だ僧の 舍を隣する有り

全無物映山 全く物の 山を映ふ無し

とも歌われる。賈島の詩には、時おり曲江池が歌われる。これは、昇道坊の西北隅にある龍華尼寺の南にまで、曲江池の一支流が流れてきていたことと關連しよう。「隣人として僧

しかない」という句も注目される。

賈島の詩は、孟郊の詩とともに、「郊寒島瘦」（蘇軾「祭柳子玉文」）と呼ばれる、ある種の豊かさに缺けた沈んだひびきをもつ。その詩風は、賈島の生來の氣質、僧侶としての前半生の經歷、貧苦にあえぐ日常生活などとも密接に關連するであろうが、樂遊原のほとりに、四、五十代にわたる十年間以上の間、住んだこと、および、樂遊原付近を暗示する詩が多く現存するという二つの事實は、樂遊原の存在が、寒瘦詩人としての賈島の詩風を形成する要因の一つとして指摘できるように思われる。繁華な巨唐の都のなかとは思われぬ、すさまじき樂遊原の環境が、賈島の詩風に對して、濃密な陰影を與えているようである。

もっとも、近くの春明門・延興門付近や曲江池周邊には、酒樓が多い。⁽⁵⁰⁾韋應物の詩（酒肆行）にみえる高さ百尺の酒樓は、詩中の「丹鳳闕（大明宮の正門丹鳳門）を廻瞻し、樂遊苑を直視す」の句によれば、「樂遊苑の北の斜面の宣平坊邊りの坊に立地していた」（妹尾達彦「唐代長安の盛り場」I）であろう。とすれば、『類編長安志』卷七にみえる、

胭脂坡、新説曰、在宣平坊南。開元・天寶間、皆妓館倡女所居。商左山詩曰、少陵野老吞聲哭、不到胭脂翡翠坡。

の記事が改めて注目されてくる。胭脂坡と翡翠坡は、李好文の「城南名勝古跡圖」にも見える地名である。商左山の事跡は未詳であるが、引用詩句の前句は、杜甫の「哀江頭」(七五七年作)と全く同じであり、少陵の野老とは杜甫を指す。韋應物詩(七三七?、七九一?)の酒肆の所在地は、おそらく胭脂坡にある花柳の巷であろう。ちなみに、胭脂とはベニのこ、胭脂・燕支なども書く。

(8)

次に、酒宴・野宴の地としての樂遊原のイメージについて觸れたい。韋述『兩京新記』の逸文(曹元忠輯)には、次のごとくある。

其地(樂遊園)、四望寬敞。每三月上巳・九月重陽、士女遊戯就此、祓禊登高。幄幕雲布、車馬填塞。綺羅耀日、馨香滿路。朝士詞人賦詩、翌日傳於京師。故杜少陵有樂遊苑歌。

唐代前半期の、行樂地としてのありさまをよく伝える。祓禊の上巳節や登高の重陽節には、かなりにぎわったらしい。しかし、杜甫の「樂遊苑(園)の歌」は、原注に「晦日、賀蘭の楊長史の筵にて醉中の作」とあり、正月晦日(末日)の作で

唐都長安樂遊原詩考(植木)

ある。正月晦日は、徳宗の貞元五年(七八九)、中和節(二月一日)が成立する以前、みそぎの行われる重要な祭日であった。杜甫の詩は、一般に天寶十載(七五二)、四十歳のときの作とされ、

樂遊古園萃森爽 樂遊の古園 萃として森爽
煙繖碧草萋萋長 煙繖り 碧草萋萋として長ぶ

公子華筵勢最高 公子の華筵 勢最も高く

秦川對酒平如掌 秦川 酒に對いて平らかなること
掌の如し

の句で歌いおこされる。「萃として森爽」とは、高くさわやかにそそりたつ形容。吉川幸次郎『杜甫詩注』Iは、第三句を、「早春の若草の山の上、あちこちに野宴の席が設けられているうち、地勢最も高き場所を占めるのは、あなた(公子)の華やぐ筵」と注する。樂遊園の上からは、秦川(關中平原)の廣がりゆくさまが悠かに見わたせた。

樂遊園付近での華やかな宴遊は、曲江池のほとりから、高原の上にかけて廣範圍で行われた。杜甫の同じ詩にいう、

閨闔晴開映蕩蕩 閨闔晴れに開いて 映蕩蕩

曲江翠幕排銀勝 曲江の翠幕 銀勝を排ぬ

拂水低徊舞袖飄 水を拂いて 低徊 舞袖飄り

縁雲清切歌聲上 雲に縁(のほ)りて 清切 歌聲(あが)上る

閨闈とは芙蓉園の門を指すらしい。曲江池のほとりには、高貴な遊覽者たちの姓名や爵號などを書きしるした銀榜（銀字の高札）が多く立ちならんだ。池のそばで行われる華麗な舞踊と、麓から高原上へ押しよせてくる歡聲。壯大な野宴風景が描かれる。

ところで、こうした野宴を歌う作品群のなかで、ほぼ作成年代を確定しうる最も早い詩は、王勃の「春日、樂遊園に宴して、韻を賦(つか)ちて接の字を得たり」である。賦韻とは、二人以上の作者が、ある限定された範圍内から韻字を分けとつて競作する遊びをいう。詩は、「帝里 寒光盡き、神皋(みか) 春望(し) 泱(あまね)し」と歌いおこし、やがて詩作を樂しむ酒宴の様子が歌われる。

この詩は、作者が高宗の怒りにふれて都長安の沛王（李賢）府から追放された總章二年（六六九）、二十歳以前の作と考え(57)てよい。おそらく、沛王府修撰時代の作であろう。これは、すでに述べた太平公主の原上の盛集より、三十年ほど早い。

樂遊原上で行われた、注目すべき盛大な野宴は、やはり玄宗が開元十年代前半(58)に行なった宴遊である。玄宗みずから「二相已下の群臣(とも)と同一樂遊園にて宴す」詩を作り、張説・

宋璟・蘇頌・崔沔(べん)・張九齡・胡皓・王翰・崔尙・趙冬曦の唱和詩が現存する（『文苑英華』卷一七五、園）。ひとまず唱和詩（『奉和聖製同二相已下群臣樂遊園宴』）の詩句にもとづいて、盛宴のありさまをかいま見てみよう。蘇頌の詩には、

座密千官盛 座は密(しほ)し 千官の盛

場開百戲容 場は開く 百戲の容

とあり、群臣がいならば樂遊園の會場には、興を深めるために、露天の演藝場が設けられた。趙冬曦の「延曼戲龍魚」の句も、巨獸の背上で演ぜられる、いわゆる魚龍・曼延の百戲をいう(59)。野宴の周圍は、色あざやかな幕が天高く重なりあっていた。もちろん、崔尙の詩に「花は相國の酔ひを催し、鳥は樂人の彈ずるに和す」とも歌われるように、妙なる音楽も盛んに演奏された。

宴遊の地が昔の樂遊苑の地であったことは、張説の「漢苑佳遊の地」の句によつてもわかる。崔沔の「宴を終ふ 國(みやこ)の陽(みなみ)」や、崔尙の「供帳(うたげ) 高きに憑(たよ)りて列(つら)なる」の句も、樂遊原とその斜面、なかでも曲江池にいたる南斜面の地をおおう盛集であったことを物語る。

仲春二月を迎えた春景色は、崔沔の詩に、

落花飛廣座 落花 廣き座に飛び

垂柳拂行觴 垂柳 行めぐる觴さかすまを拂はらふ

と歌われ、蘇頌の詩には、「二下一上（一作）」花ひと齊ひとしく發はらぎ、周迴めぐ柳あまね遍こまく濃こまかなり」ともいう。

ちなみに、晩春三月の樂遊原周邊の風景は、張説によつて、

魚戲芙蓉水 魚は戯る 芙蓉の水

鶯啼楊柳風 鶯は啼く 楊柳の風

と歌われている（三月三十日「二作二月三日一」詔宴樂遊園賦得風字）。曲江池は蓮の名所であった。さらに春の終りになると、「二那一ともする無なし 楊花 愁思を起おこすを、滿天の飄落雪紛紛たり」という柳絮の雪景色が、訪れる人々の春愁を深めたに違いない（李頻「樂遊原春望」）。

また樂遊原からの秋景も紹介しておこう。中唐の羊士諤は、「樂遊原に登りて司封孟郎中・盧補闕に寄す」詩のなかで、

神皋みやこ值宿雨 宿雨に値あひ

曲水すゐ已増波 已すでに波を増あす

白鳥凌風迴 白き鳥 風を凌いで迴めぐり

紅葉はす濯露多 紅き葉 露に濯あはれて多おし

と歌う（七律の領・頸聯）。曲水とは、曲江池を指す。

唐都長安樂遊原詩考（植木）

(9)

多數の人々のつどう樂遊原上の野宴は、安史の亂後、急速に影をひそめたらしい。(60)これにともない、中晚唐期、さまざまの憂いをいだきつつ、ただ一人で車馬を驅って登る人たちが急速に増加したようである。(61)前章の終りに述べた羊士諤の詩は、「秋懷あき悵たうとして獨り過より」し時に生まれたものである。また錢起の「樂遊原の晴望、中書李侍郎に上る」詩は、仕官の希望を訴えた詩であり、「爽氣 朝來萬里清し、高きに憑りて一望すれば九愁、輕し」と歌われる。

こうした憂愁の詩人の心に鋭く反應する風土——樂遊原は、李商隱の名作「樂遊原」詩のなかに典型的に表現される。

向晚意不適 晚なんに向むかんとして意適こころかなはず

驅車登古原 車を驅りて 古原に登る

夕陽無限好 夕陽はは 限り無く好なし

只是近黄昏 只是まさに黃昏(62)に近ちし

この詩は、從來、「蓋し唐の衰ふるを憂ふるなり」（蔡正孫『詩林廣記』前集卷六）という楊誠齋の評語に端的に象徴されるように、唐朝の崩壞への豫感を鋭く集約した憂愁が内在す

るとされてきた。晚れゆく大唐帝國に對する豫言的挽歌としての批評は、清の何焯の、

遲暮之感、沈淪之痛、觸緒紛來、悲涼無限。歎時無宣帝可致中興、唐祚將淪也。

という評語にも見いだせる（朱鶴齡『箋註李義山詩集』に付す沈厚煥の輯評）。

何焯の評語のなかでは、樂遊原の地と前漢王朝の「中興の祖」宣帝とを結びつけた點に注意したい。宣帝は『漢書』宣帝紀の贊に、「功は祖宗を光かし、業は後嗣に垂れ、中興と謂ふべし」とある。この點は、潘岳の「西征の賦」（二九二年作）のなかにも、「孝宣（帝）を樂遊（廟）に宗り、衰緒（衰えた皇統）を紹いで、以て中興す」と見えている。また盛唐の豆盧回の前引詩にも、「（宣帝）卒に中興の主と爲る」とあり、宣帝に對する共通した認識であった。

長安城内で地勢が最も高い樂遊原は、大唐帝國の盛衰を端的に象徴する都長安の全貌、なかでも政治の中樞部である大明宮のそれを眺めうる高原であった。唐朝の勢力が下降する中晩唐期、樂遊原上に立つと、かつて前漢王朝の衰退を一時くいとめた中興の祖宣帝ゆかりの地であるという事實が、詩人たちの脳裡に微妙な影をおとしたことであろう。

樂遊原と政治との結びつきを端的に示すのは、白居易が元和五年（八一〇）、三九歳のときに作った「樂遊園に登りて望む」詩である。

獨上樂遊園

獨り樂遊園に上りて

四望天日曠

四望すれば 天日曠る

東北何靄靄

東北 何ぞ靄靄たる

宮闕入煙雲

宮闕(63) 煙雲に入る

愛此高處立

此を愛して高處に立てば

忽如遺垢氣

忽ち垢氣を遺るるが如し

耳目暫清曠

耳目 暫く清曠なるも

懷抱鬱不伸

懷抱 鬱ふさぎて伸びず

下視十二街

十二街を下視すれば

綠樹間紅塵

綠樹 紅塵まに間る

車馬徒滿眼

車馬 徒らに眼に滿ち

不見心所親

心に親しむ所を見ず

孔生死洛陽

孔生は洛陽に死し

元九謫荆門

元九は荆門かに謫なざる

可憐南北路

憐あしむべし 南北の路

高蓋者何人

高蓋の者は 何人ぞや

詩は、剛直な性格のために閑職にとどめおかれた孔戯こうぎの

死、および、友人の元稹が政争の犠牲（河南尹房式を彈劾したことや宦官劉士元との對立）になって江陵士曹參軍に左遷された事件をモチーフとして生まれた。霍松林は、第二句の「天日曠る」を、當時の政局を象徵させた表現と見なし、第三・四句は、朝廷が「黑暗勢力」におおわれていることを指すという（『白居易詩譯析』）。佐久節は、『白樂天詩集』一（續國譯漢文大成）のなかで、最後の二句を、「南を見ても北を見ても高車駟馬を驅つて時めいてゐる者は、取るにも足らぬ徒輩ばかりだ。慨嘆に堪へない」と譯する。當時の爲政者に對する白居易の痛烈な批判の口吻を彷彿とさせる譯文といえよう。事實、この詩は、當時の爲政者たちの激しい怒りをかっている（白居易「與元九書」）。

樂遊原と政治との結びつきは、杜牧の「將に吳興に赴かんとして樂遊原に登る 一絶」詩によって、より緊密化する。

清時有味は無能

清時に味有るは是れ無能

閑愛孤雲靜愛僧

閑は孤雲を愛し靜は僧を愛す

欲把一麾江海去

一麾を把りて 江海に去らんと欲し

樂遊原上望昭陵

樂遊原上 昭陵を望む

詩は、大中四年（八五〇）の秋、杜牧が京官の吏部員外郎から湖州刺史へ轉任するときの作である（四八歳）。一麾とは、

唐都長安樂遊原詩考（植木）

刺史の旗さしもの、昭陵とは、唐の太宗の陵墓であり、樂遊原からは西北方向にあたる。當時、杜牧は、「藩鎮の跋扈と異民族の侵入」という重要な政治課題に對して獻言したが、當時の對立する二つの黨派のいづれからも無視された。杜牧の地方への轉出は、地方官のほうが収入が多いという經濟的理由のほかに、こうした當時の政局に對する杜牧自身の「怨み」が強く介在していたらしい。この點は、宋の葉夢得撰『石林詩話』卷中のなかに、「此れ蓋し當時に不滿なり。故に末に（昭陵を望む）の句有り」と指摘され、『增註三體詩』卷一の天隱注のなかにも、

牧居下位、心常不樂。望昭陵者、不得志於時、而思明君之世。蓋怨也。首言清時、反辭也。

と見えている。ちなみに、落第を重ねた詩人李洞は、昭宗の大順二年（八九一）、知貢舉裴贄の簾前に、「公道 此の時如し得しからざれば、昭陵に慟哭して一生休まん」の詩句（七言句）をささげている。おそらく杜牧の詩意を踏まえている。

白居易と杜牧の詩のごとき顯著な諷諭詩の存在は、李商隱の「樂遊原」詩（向晚意不適）のモチーフも、單なる往きて返らぬ時間への詠嘆をこえた、ある種の政治的な心情と關連す

るのではないかという疑問をいだかせる。その李商隱詩は、今日、大中十年(八五六)ごろ「最晩年」の作とも考えられている。(69)これは、杜牧詩の六年後にあたっている。樂遊原の地は、晩唐期、その名稱「樂遊」とは裏腹に、精神的に樂し、かゝらざるときに訪れると、複雑に反應しうる独自の風土へと變化したことをうかがわせる。

杜牧には、さらに「樂遊原に登る」詩一首が傳わり、李商隱には、著名な「樂遊原」詩(前引)のほか、同題の詩二首や「柳」一首が傳わる。杜牧の詩にいう、

長空澹澹孤鳥沒 長空澹澹として 孤鳥沒す

萬古銷沈向此中 萬古銷沈して 此中に向かふ

看取漢家何似業 看取へ 漢家は何似る業ぞ

五陵無樹起秋風 五陵には樹の秋風を起こす無し

劉拜山は、この詩を「傷時憂國之作、借漢喻唐」と評する

(『千首唐人絶句』下)。

ちなみに、李商隱の「樂遊原」詩を、もう一首あげておく、

萬樹鳴蟬隔斷虹 萬樹の鳴蟬 斷虹を隔つ

樂遊原上有西風 樂遊原上 西風有り

羲和自趁虞泉宿 羲和自ら虞泉を趁めて宿し

不放斜陽更向東 斜陽をして更び東に向かは放めず
羲和とは太陽の御者、虞泉とは日没の場所「虞淵」のこと(唐の高祖李淵の諱を避ける)。葉葱奇は、この詩を、もはや再興しえぬ唐朝の衰退を嘆く詩であり、同題の五絶(向晩…)の寓意と同じだと評する(『李商隱詩疏注』卷中)。

樂遊原は、秦漢以來、幾多の王朝の興亡を見つづけてきた古原・荒原であった。唐朝の政權は安史の亂後、急速に衰退していく。このとき、巨唐の都城内にあって、しかも都長安の全貌をくまなく見おろせる樂遊原の地は、その地理的特殊性のゆえに、空しく經世の志に燃える憂愁の詩人たちの琴線に、複雑に反應しはじめた。彼らは、大明宮内でくり返される不毛な政争や不公平な人事、爲政者たちの腐敗などを憂えつつ、やがて確實に迫りくる唐朝の崩壊への豫感におののいたらしい。

樂遊原は、漢の中興の祖、宣帝ゆかりの地であるために、唐朝の再興という、はかない一縷の希望を生みやすい地でもあった。しかし、都の郊外に點在する陵墓の存在は、こうした甘やかな夢をうちくたく厳然たる歴史的事實——王朝の興亡や盛者必衰の理を深く痛感させたことであろう。中晩唐

期、樂遊原に登るといふ行爲は、もはや盛大な野宴を意圖せず、時として個人の境遇に對する詠嘆を超えた、現實の政治や唐朝の將來に對するある種の憂慮が、自然に流露する獨特の歌枕へと變貌したといえるであらう。

〔注〕

- (1) 『雍錄』卷六所引「長安志」
- (2) 張九齡「登樂遊原春望書懷」、宋璟「奉和聖製同二相已下群官樂遊園宴」、白居易「立秋日登樂遊園」、韓愈「酬司門盧四兄雲夫院長望秋作」など。
- (3) 「李商隱と樂遊原」(中田勇次郎先生頌壽記念論集『東洋學藝林論叢』平凡社、一九八五年)。
- (4) 本稿の本文・注のなかで觸れないもののみをあげると、裴度「至日登樂遊園」、裴夷直「和邢郎中病中重陽強遊樂遊原」、張祐「登樂遊原」などがある(作者名をあげた場合も除く)。
- (5) 張籍・司空曙(「雪」)・唐彥謙・韓愈・李白(「憶秦娥」)の五人。ただし李白の作は古來疑問であり、しかも詞であるが、ひとまず加えておく。六首とは李商隱の「柳」詩を加えたもの。
- (6) 馮浩『玉谿生詩集箋注』卷三參照。
- (7) 『唐詩紀事』卷五三には、末の二句を「愛此偏高野、閑來竟日頻」に作る。

唐都長安樂遊原詩考(植木)

- (8) 『漢書』卷五七下、司馬相如傳。
- (9) この題は清の嚴可均『全漢文』卷二一に據る。
- (10) 何焯『義門讀書記』前漢書一參照。
- (11) 仇兆鰲『杜詩詳注』卷二「樂遊園歌」にも、「音洛」と注する。これに對して、一九八二年刊行の朱碧蓮・王淑均『杜牧詩文選注』(上海古籍出版社)は、二か所で「月」(yu)「と注する。單なる誤解か?」
- (12) 楊寬『中國古代陵寢制度史研究』(上海古籍出版社、一九八五年、一八〇頁)參照。
- (13) 靜嘉堂本『太平御覽』の「引書目」には、楊を「陽」に作る。なお『新唐書』卷五九、藝文志三に、「韓楊天文要集四十卷」を著録する。
- (14) 『太平寰宇記』卷二五、雍州萬年縣の條にも、樂遊廟を「在昇平坊」とする。
- (15) 『雍錄』卷七もほぼ同じ。
- (16) 『歷史地理』三輯(上海人民出版社、一九八三年)。
- (17) 武伯綸『西安歷史述略』(陝西人民出版社)に收める「隋大興・唐長安城內坊里・官衙・王府和寺觀的分布」の圖も同じ。
- (18) 拙稿「唐都青龍寺詩初探」(秋月觀映編『道教と宗教文化』[平河出版社、一九八七年])參照。
- (19) 「唐代長安東南隅(上)」(『文博』一九八四年一期)

- (20) 「説唐長安的青門」(『學林漫録』七集、中華書局、一九八三年)
- (21) 新昌坊の青龍寺の北の高原は、とくに「青龍岡」とも呼ばれた(白居易「題新居寄元八」)。この青龍岡はまた、長安の東郊(萬年縣長樂郷)から出土した張渙の墓誌銘に見える「青龍原」と同一のものである(『文博』一九八二年二期に收める賀粹城「唐長安城歴史與唐人生活習慣―唐代墓誌銘札記之二」参照)。
- (22) 『玉海』卷一六〇、宮室に「韋述兩京記、成於開元十年」とある。ただし、後述する杜甫の「樂遊園歌」(天寶十載作)の記事を收める逸文を残すことは、一旦成立後も、増補されたことを示そう。
- (23) 『新唐書』卷八三、諸帝公主傳や『資治通鑑』卷二一〇参照。
- (24) ㊦19参照。
- (25) 中島敏夫・齋藤茂『唐詩選』中(學習研究社)の蘇頌詩の注参照。
- (26) 清の康熙帝『御選唐詩』(一七一三年作)卷一七・一九の沈佺期・宋之問の詩の注には、前引の『新唐書』諸帝公主傳を引く。
- (27) 『立命館文學』通卷二二四號(一九六四年)。
- (28) 高木正一『唐詩選』一(朝日新聞社、文庫本)には、「長安縣の南、曲江の北にあった高原、樂遊原」とする(二二九頁)。ただし、唐代では長安縣ではなく、萬年縣である。
- (29) ㊦20の論文も参照。
- (30) 宋之問の詩の解釋については、金聖嘆『貫華堂選批唐才子詩』卷一も参考になる(江蘇古籍出版社、金聖嘆全集四)。
- (31) 太平公主の南莊は、韓愈の「遊太平公主山莊」詩の山莊でもある。清の方世舉以來、すでに述べた公主の樂遊原上の觀池として解釋するのが一般である。錢仲聯『韓昌齡詩繫年集釋』の補釋には、韓愈詩の山莊を、李好文の「城南名勝古跡圖」を参照して、「城南の樂遊原に在り」とする。
- (32) のち、開元末から天寶初めの宰相李林甫に與えられた。
- (33) 『冊府元龜』卷一三八、帝王部旌表二。
- (34) 『考古學報』一九六三年二期に收める「唐萬年縣・長安縣郷里考」所收。
- (35) 『東洋史研究』四〇卷三號(一九八一年)。
- (36) 唐代の折衝府の一つに、「樂遊府」があった。谷霽光「唐折衝府考校補」(『二十五史補編』所收)に見える。
- (37) 豆盧回の生存した時代は、從來不明であり、『全唐詩』には「無世次爵里可考」(卷七七七)に收められていた。
- (38) 『唐人行第録』(上海古籍出版社、一九七八年再版)所收。なお岑仲勉『元和姓纂四校記』卷九も参照。
- (39) 古小説叢刊、程毅中點校、中華書局本。

- (40) 白居易「勸酒」、『新唐書』卷八三、諸帝公主傳、『太平廣記』卷二八三(白行簡)・卷三〇六(盧佩)の條参照。また唐の李緯(唐)『鞏下歲時記』の逸文には、「清明、都人並在延興門、看人(一作内人)出城灑掃、車馬喧闐」とある(守屋美都雄『中國古歲時記の研究―資料復元を中心として』所收)。
- (41) 高橋稔・西岡晴彦『六朝・唐小説集』(學習研究社、一九八二年)の補注(四五八頁)参照。
- (42) 『太平廣記』卷四五四、薛靈の條。
- (43) 『長江集新校』(上海古籍出版社、一九八三年)所收。
- (44) 注(34)参照。
- (45) 注(20)参照。
- (46) もと『清華學報』に發表され、一九四七年には商務印書館から單行本として刊行された。
- (47) 『中國歷代著名文學家評傳』第二卷(呂慧鵬らの編、山東教育出版社)所收。
- (48) 『冊府元龜』卷五九二、掌禮部の會昌三年の奏議に、「自威遠軍(安善坊にあり)向南三坊、俗稱圍外地」とある。なお布目潮風・妹尾達彦「唐代長安の都市形態」(『唐宋時代の行政經濟地圖の作製、研究成果報告書』、一九八一年所收)参照。
- (49) 夏承焘「据《白氏長慶集》考唐代長安曲江池」(『月輪山詞唐都長安樂遊原詩考(植木)論集』中華書局、一九七九年所收)参照。
- (50) 石田幹之助「當壚の胡姬」(平凡社・東洋文庫「増訂長安の春」所收)や向達「唐代長安與西域文明」(同名書、生活・讀書・新知三聯書店、一九七九年再版所收)参照。
- (51) 『史流』二七號(北海道教育大學史學會、一九八六年)所收。
- (52) 李肇『唐國史補』下に、「貞元五年、初置中和節」とある。
- (53) 田中克己「唐代の年中行事」(『中國の自然と民俗』、研文出版所收)参照。なお吉川幸次郎「杜甫詩注」Iは、『新唐書』諸帝公主傳にもとづいて、「太平公主の掘った池が、市民の春のみそぎの場所となった」とするが、むしろ廣大な曲江池がみそぎの場所であったと思われる。當時、樂遊原と曲江池は、一つの景勝地として意識されていた。
- (54) 『杜甫詳注』卷二、張綬の説や、四川省文史研究館編『杜甫年譜』など参照。
- (55) 拙稿「秦川と蜀川」(研文出版の「けんぶん」4、一九八六年所收)参照。
- (56) 「縁」を「のぼる」とする訓は、神田喜一郎「日本書紀古訓攷證」(『神田喜一郎著作集』二所收)参照。
- (57) 聶文郁『王勃詩解』(青海人民出版社、一九八〇年)参照。
- (58) この宴遊の日時を、『唐音琴籤』卷二七、談叢では、開元十七年(七二九)とするが、近年、陳祖言は開元十八年二月と

- する新説を立てた(『張說年譜』、中文大學出版社、一九八四年)。しかし、唱和者の一人、蘇頌は開元十五年に没しており(『資治通鑑』卷二二三)、また張九齡も開元十八年二月當時、南の洪州に滞在していたはずである(楊承祖『唐張子壽先生九齡年譜』、臺灣商務印書館、一九八〇年参照)。それでここではひとまず開元十年代前半と推測した。
- (59) 『後漢書』安帝紀の延平元年の注や、張衡『西京賦』(『文選』所收)参照。
- (60) 中唐の憲宗は、おしのびで樂遊原に遊んだ(『舊唐書』卷一六二、潘孟陽傳)が、野宴は開催してはいないらしい。
- (61) 後引の白居易「登樂遊園望」詩も、元稹の唱和詩「酬樂天登樂遊園見憶」のなかに「昔君樂遊園、悵望大欲曛」とある。
- (62) 「只是」の解釋には定説がない。ここではひとまず、周汝昌の「就是」「正是」とする説を参照して訓讀した(上海辭書出版社刊『唐詩鑑賞辭典』)。
- (63) 清の徐松は南内(興慶宮)を指すとする(『唐兩京城坊考』卷三)が、むしろ東内(大明宮)であろう。
- (64) 「聞《樂遊園》寄足下詩、則執政柄者扼腕矣」とある。
- (65) 杜牧が地方へ赴任する途中、樂遊原にたちよったのは、その地が長安城の東壁の延興門と近かったことも關連しよう。延興門からの旅立ちには、王維の「別弟綰後、登青龍寺望藍田山」や、白居易「和答詩」十首の序などを参照。
- (66) 小川環樹「杜牧詩索引序」(山内春雄『杜牧詩索引』彙文堂刊所收)参照。
- (67) 布目潮風・中村喬「唐才子傳之研究」(汲古書院)参照。
- (68) 陳新「唐人絕句選」(中華書局、一九八二年)参照。
- (69) 楊柳「李商隱評傳」(江蘇人民出版社、一九八一年)や董乃斌「李商隱傳」(陝西人民出版社、一九八五年)など。
- (70) この點は、すでに馮浩『玉谿生詩集箋注』卷三に見えてい
- (71) 松村昂「李商隱と樂遊原」(注(3))には、樂遊原が、①大勢が集まって酒宴を催す場所、②單獨で登って、王朝の來しかた行くすえを考え、あるいは時間の推移を嘆き、おのが人生に思いを致す場所、であることを指摘する。
- ※ 本稿は、第三十六回東北中國學會(秋田大學教育學部)で行った同題の發表をもとに執筆した(昭和六十二年五月三十日)。
また本稿の訓讀は舊假名、ただし字音・字訓を表すルビはみな新假名で表記した。
- ※ 本書に収める二葉の地圖は、松浦友久・植木久行『長安・洛陽物語』(集英社、中國の都城シリーズ、一九八七年)に掲載したものを利用した。
- ※ 樂遊原の「遊」の字は、一に「游」に作るが、本稿では「遊」字に統一した。